

# 8人目のオリンピックピック代表選手

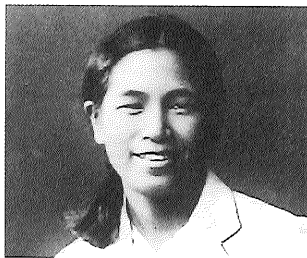
学園理事長 小林素文

昨年8月は、リオデジャネイロ五輪で日本中が沸きました。体操、レスリング、バトミントン、水泳、柔道の金メダル。陸上男子400mリレーや卓球の銀メダルなど。大会後の東京銀座でのパレードは華やかで、心からの祝福が送られていました。

こうしたスポットライトを浴びた選手達の一方で、思い描いた結果が得られず、無念の帰国をした選手達もいました。しかし、近代オリンピックの父といわれるクーベルタン男爵は「オリンピックで重要なことは勝つことではなく参加することである」と述べ、「自己を知る、自己を律する、自己に打ち克つ、これこそがアスリートの義務であり、最も大切なことである」と語っています。

オリンピック精神にのっとり、ひたむきで、一途な努力を重ねた全てのオリンピック選手にエールをおくり称えたいと存じます。

\*



井戸田きよ子さん

文武両道を掲げる愛知淑徳は何人かのオリンピック選手を輩出しています。戦前の高等女学校の時代にも、オリンピック選手に値する生徒がいました。当時の女子陸上800mの日本記録保持者、井戸田きよ子さんです。それなのに何故オリンピックにでられなかったのか。それは次の事情があったからです。

「1928年アムステルダム五輪で、紆余曲折の末、初めて試験導入された女子陸上競技。5種目のうち、注目の最長距離、800mレースの模様は各国で半ばセンチシヨナルな報道を巻き起こした。『この距離は女性には負担が過ぎる。9人中6人がゴール後疲労で頭から地面に

倒れ、数人が運ばれた』：中略：こうした報道に後押しされて、女子陸上、中・長距離種目の除外を決める。800mが再び日の目を見るのは1960年ローマ大会と、32年もたつてからだ」（読売新聞特集『オリンピック物語第4部女性の戦い』）

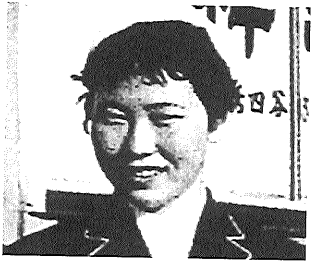
女子マラソンが正式種目である今からは考えられない事情から、井戸田選手はオリンピック選手になれなかったのです。しかし、IOCに認められていなかったものの、当時の女子の世界選手権である、女子オリンピッククロンドン大会において、井戸田さんは陸上女子800m決勝で日本記録を出し、堂々の第6位に入賞いたしました。

井戸田さん達が培った高等女学校時代の淑徳魂は、戦後の愛知淑徳に受け継がれ、オリンピック選手を輩出していきます。

\*

本校出身のオリンピック選手第一号は岩井（旧姓神野）眸さんです。岩井さんは、メルボルン五輪とローマ五輪で自由形の水泳代表選手となりました。

メルボルン五輪が行われた



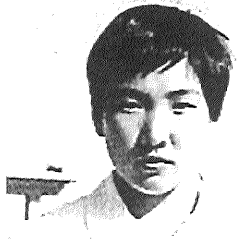
神野 眸さん

のは1956年。愛知淑徳はまだ池下校舎でした。昭和3年、東新町から池下へと校舎を移転した当時の水泳部員が、校地にあった甍が池と呼ばれる池で水泳に明け暮れた淑徳魂を受け継ぎ、同じ地に建造された25mプールでの練習の日々の成果が実ったのです。

岩井さんはその後、愛知淑徳の体育の教員となりましたが、結婚を機に退職、転勤を重ねる夫の勤務先にあるスイミングスクールで水泳指導に携わりました。そして、平成7年愛知淑徳水泳学校の校長に就任。丁寧な少人数教育で好評を得ました。

2人目のオリンピック選手は窪田（旧姓小林）美和子さんです。メキシコ五輪の自由形の水泳代表選手として、400mリレーの6位入賞に貢献しました。

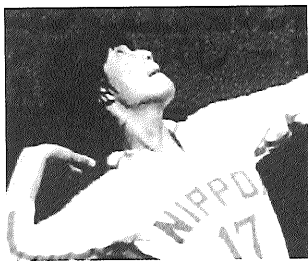
窪田さんは創立者小林清作先生の曾孫にあたりますが、立派に創立者が掲げた淑徳魂を発揮してくれました。窪田さんは今もマスターズスイミングでプレゼンターをつとめたり、選手としても活躍しています。



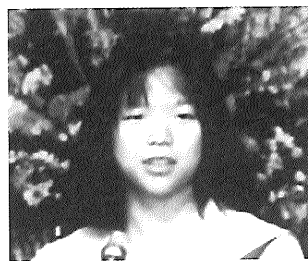
小林美和子さん

3人目は、ロサンゼルス五輪とソウル五輪でバレーボール代表選手となった廣紀江さんです。

廣さんは愛知淑徳高校3年生の時、本校を全国大会に導きました。その後、実業団の熱心な誘いを断り、筑波大学に進学。名センタープレーヤーとして、ロス五輪では銅メダル、ソウルでは4位入賞に貢献しました。現在も学習院大学スポーツ・健康科学センター教授として、スポーツと関わっています。



廣 紀江さん

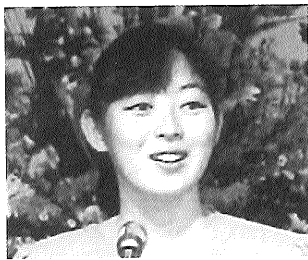


北野高代さん

スポーツ庁長官)の背泳での金メダルが日本中をわかせるしたが、北野さんの153センチと小柄な体を全身ばねのように使い、トビウオのように飛び跳ねていく、当時16歳の姿は美しく初々しいものでした。

て会議委員をされています。

4人目は、ロサンゼルス五輪とソウル五輪の水泳自由形



中森智佳子さん

で代表選手となった水野(旧姓中森)智佳子さんです。現在は、東京都千代田区の民生児童(主任児童)委員として、小中学校などの招きに応じて水泳指導をしたり、ボランティア養成講座で講師をされたり、千代田区子ども・子育て

6人目はアトラクタ五輪でソフトボール代表選手の渡辺

伴子さんです。左腕のウインドミル投法で、中国戦に見事完封勝利を飾り、日本チーム4位入賞に貢献しました。その後、TBS系列筋肉番付で、ストラックアウト9枚抜けを実現したり。キャスターや解説者としても活躍されました。



渡辺伴子さん



伊藤幸子さん

7人目は、ソフトボールで内野手として北京五輪代表選手となった伊藤幸子さんです。北京五輪のソフトボールは上野投手の大活躍で、念願の金メダルを見事に獲得、日本中がわきたちました。

ナイン最年長のベテラン選

\*

手の伊藤さんが監督から期待されたのは、チームのまとめ役でしたが、その役割を見事に果たしただけでなく、アメリカ戦で代打としてタイムリーヒットを打つなど選手としても活躍しました。

井戸田さん、そして7人のオリンピック選手を受け継ぎ、昨年のリオ五輪では、愛知淑徳出身の8人目のオリンピック代表選手が誕生しました。7人制女子ラグビー(サクラセブンズ)代表選手となった兼松(旧姓本間)由香さんです。チーム最年長の34歳でママさんラガーの兼松さんは、チームのまとめ役としても、選手としても活躍しました。

兼松さんは本校を卒業後、愛知教育大学へ進学したのを機に、5歳から12歳まで熱中したラグビーを再開。19歳で国際大会に出場し、第一線で活躍するようになりました。結婚と出産を重ねた後も第一線で現役を続けますが、09年ワールドカップ直前に膝前十字靭帯を断裂。13年ワールドカップを前には左ひざの半月板を負傷。こうした様々の経験を重ね、今回、リオの大舞台で、8歳となった娘の目の前で、トライをあげた本校8人目のオリンピック代表選手、兼松さんに心よりの拍手と祝福を送りたいと存じます。



兼松由香さん

全力を尽くしました。

兼松さんは、本校在学中はフットボール部員で、その当時のことを次のように語っています。「チームの中で私はおちこぼれ。だからこそ人一倍努力して、ものすごく厳しい練習にしがむしやりに取り組みました。だからこそ人一倍努力して、ものすごく厳しい練習にしがむしやりに取り組みました。」(学園広報117号)こうした努力が実り、高3のとき国体出場を果たしています。

☆写真下の名前は撮影時のものです。